



おかげさまで当会は創立50周年を迎えることができました



松岡朝が設立した南京児童学園の生徒による合唱（1943年頃）

- 目次 ★ 50周年記念「チャリティーコンサート」開催日程のお知らせ (P2)
★ 「松岡朝物語」(仮称) 第10回 (P2)・第11回 (P13)
★ 25点の日本画が豪州首都へ移管決定 (P23)
★ 3月31日 つどいの会 開催のお知らせ (P23)

50周年記念「チャリティーコンサート」開催日程のお知らせ

次回開催日程：2018年12月7日(金) 会場：霊南坂教会
出演者：大澤一彰(テノール)、青盛のぼる(ソプラノ) 他、弦楽四重奏、ハープ

当会が発足してから今年で50年。これを記念して、今年のチャリティーコンサートは更に豪華なものとなります。皆様からのご要望が多数寄せられている大澤一彰さんと、世界で活躍する青盛のぼるさんによるデュエットをお楽しみください。

松岡朝物語(仮称) 第10回

第10回 友誼—南京の社交クラブ

文/角山祥道

47

逆説的だが、1939年(昭和14)という年は、日本人が「幸福」に酔っていた時代かもしれない。1937年より始まった日中戦争に、日本陸軍は23個師団、計70万人を投入。戦線は拡大し続けたが、日本国民にもたらされたニュースは、「勝利」の二文字しかなかった。1939年1月8日から一週間、靖国神社では「戦車大展示会」が開催され、約10万人が訪れる大盛況となった。特に初日は、代々木練兵場から靖国神社まで戦車のパレードが行われ、沿道は人で埋め尽くされた。

横綱双葉山が連勝街道を突き進んでいたのもこの時期である。国民は双葉山の連勝を、日本軍の進撃と重ね合わせて酔った。同年1月15日、69連勝で連勝がストップすると、国技館には座布団だけでなく、酒瓶や手あぶりの火鉢まで飛び交う大混乱に陥ったという。

『父よあなたは強かった』(作詩・福田節/作曲・明本京静)が50万枚を超える大ヒットを記録したのもこの年である。これは、朝日新聞の「皇軍将士に感謝の歌」という懸賞公募の1等をとった詩に曲をつけたものだ。

〈敵の屍^{かたがは}とともに寝て 泥水すすり草を噛み 荒れた山河を幾千里 よくこそ撃って下さった〉

〈あの日の戦に散った子も 今日九段の桜花 よくこそ咲いて下さった〉

歌詞では悲惨な状況をうたい、多くの兵士が「靖国神社」に祀られること——つまり死を暗示しているが、それらは「父よあなたは強かった」という願望にすり替えられた。

国も国民への締め付けを強めていた。学生の髪型へも口を出し、厚生省は、〈産めよ殖やせよ国のため〉〈晩婚を控えよ〉〈悪い遺伝のない人を選べ〉など、「結婚十訓」をまとめて国民に強いた。「国民徴用令」——いわゆる「シロガミ」が出されたのもこの年で、この法律によって、軍需工場などへの強制徴用が可能になった。さらには、1年の間に、近衛文麿、平沼騏一郎、阿部信行と3人も首相が替わったというのに、国民はどこかで浮かれていたのである。いや、「見たくないものを見ないようにしていた」と言うべきだろうか。日本軍の戦勝を信じ、戦車パレードに手を振り、双葉山に熱狂

していたのである。

だが日本の外を知っている人間——朝や、朝の父の健一は、日本と中国の間に起こっている戦争に心を痛めていた。憎しみあうことが、何の益も生み出さないことを、わかっていたのだ。

朝は父に言った。

「私は、アメリカに行つて初めて、アメリカ人の心情が理解できた。アメリカ人は、『弱者を助ける人でありたい』と思っている。彼らにとっての弱者は日本じゃない。中国のことなの。日本人はそのことをわかっていない」

健一が頷くのを見て、朝は続けた。

「今、日本人がやっていることは、中国で『憎しみの種』を蒔くことだけ。そんなものを蒔いても、何の実りもないわ。私は、中国の人たちと、真の友情を築きたい。私にできることは多くないとわかってる。お金もない。でも、アメリカに渡った時、懐には少ししかなかったけれど、たくさんの友だちが私を助けてくれた。私は中国で、友人を作りたい。『友情の種』を蒔きたいの」

48

朝は、外務省と警察の両方からの許可を得、1939年（昭和14）3月、中国大陸へと渡った。汽車で神戸に向かい、そこから船で上海へと向かった。滞在許可が出たのは、南京と上海だけ。まだこの地まで戦火は拡大していなかった。

上海への航路は穏やかなものだった。

船は、川幅の広い黄浦江に入っていく。岸には、高い建物が林立している。「上海バンド」——「外灘」とも呼ばれる上海租界だ。中国ともどこの国ともつかない無国籍風の建物が、上海の歴史を物語っていた。中国はイギリスとアヘン戦争（1940～42年）を戦い、その戦争に負けたことで、香港島の割譲や上海など5港の開港を強いられていた。その結果、上海には、イギリスやフランス、アメリカや日本などの「租界」が生まれ、中国最大の都市へととなっていく。表の顔は、世界の金融機関が集まる国際金融都市。裏の顔は、ナイトクラブやショービジネスで潤う夜の街だった。ゆえに上海は、「東洋のパリ」とも、「魔都」とも呼ばれた。戦争で打ちのめされたことで、中国に国際都市が誕生する。上海は、20世紀を象徴する場所だった。

朝の乗った船は、上海バンドの中心部に停泊した。朝は、宿泊するパレスホテルまで、人力車で向かった。

ホテルに入る。支配人は白人だ。そして多くの中国人女性が苦力として働いていた。彼女たちは、風呂の支度から洗濯、アイロン掛け、ベッドメイキングに食事の世話まで、宿泊客のありとあらゆる雑用を担当した。ここ上海では、中国人は被支配層でしかないのだ。上海バンドは中国の中に存在する「植民地」だった。

朝のホテルの部屋の窓からは公園が見えた。そこには大きな看板が立てかけられていた。

〈中国人と犬はお断り〉

一方で、中国人の中にも上流階級の人々がいた。上海租界には、瀟洒なレストランや店舗が建ち並び、まるで舞台俳優のような洋服を纏った中国人が、西洋人に混じってその通りを闊歩していた。彼らは特権階級だった。

そうかと思えば、人力車を引く苦力の多くは少年で、彼らは痩せこけ、骨が突き出さんばかりだった。身につけている服も、服と呼ぶには難しい代物で、何度もつぎをあてているせいか、元がどんな

服だったか半別がつかなかった。朝には、ボロきれで辛うじて身を包んでいるようにしか見えなかった。これが上海の現実だった。

朝はわずかなツテを頼りに、上海で多くの人間と会った。

上海にあるバプテスト教会(プロテスタント最大の教派)の中心人物で、英語も堪能なヤン牧師。コロンビア大学の卒業生で、上海一大きな広告代理店を営む中国人のリン氏。マサチューセッツ工科大学の卒業生で、大きな鉱業会社のゼネラルマネージャーを務める中国人のウェイ氏。南京国民政府の行政院内政部部長の陳群氏。

パターンはいつも同じだった。朝の友人は、朝に会うと、すぐさま別の有力な友人を紹介してくれた。朝は苦もなく、上海や南京の有力者たちと交誼を結ぶことができた。

上海に戦争の影はなかった。だが、朝が上海で会う人は皆、日本と中国との間の愚かな戦争を終結させたいと願っていた。

朝が上海での短い滞在を終えて日本に戻ってくると、上海に住む日本人の友人から手紙が届いていた。手紙によると、朝が日本行きの便に乗船すると、それを見送っていた友人に、軍警察が近寄ってきたのだという。

「あの女性は何者なのか。いったい何をしに来ていたのか」

友人が軍警察に丁寧に説明すると、嫌疑は晴れたようだが、納得はしなかったという。

「日本の婦人が中国人と仲良くする。いったい何の問題があるのですか？」

友人の問いに、洗面を作っていた警察のひとりが答えた。

「われわれは、英語の堪能な日本人女性がパレスホテルに宿泊しているとの情報を得た。彼女はほとんど日本人と会わず、中国人とばかり会っていた。日本人と一緒に出かけることもなかった。われわれは香港のスパイではないかと疑っていた。それで常時2名以上の人間に、彼女を尾行させていたのだ」

手紙はこう結ばれていた。

〈尾行されていたのに気づきましたか？〉

「私がスパイだって！」

朝は、父・健一に手紙を見せ、二人して大いに笑った。

友人は〈軍警察は愚かだ〉と憤っていたが、一方で、ひとりの女性が中国人と会うことだけで、軍が神経を尖らせたのもまた事実だった。

当時、中国大陸に展開していた日本軍は、青シャツを恐れていた。青シャツ——イタリアのムッソリーニによって組織された民兵組織「黒シャツ隊」にならって、「青シャツ」と呼ばれた彼らは、「藍衣社」、正式には「三民主義力行社」といった。蒋介石直属の国民政府の情報・工作機関で、彼らは親日政府要人の暗殺やゲリラ活動など、抗日テロ活動に従事していた。朝は、藍衣社のスパイと疑われたのだった。

中国をこの目で見たことで、朝の中ではかの国への思いが大きくなっていった。朝は父に相談した。「わずかな時間だけど中国に滞在して、私は中国人のことが少し理解できた。彼らは、見知らぬ人には、たとえ同胞であってもゾッとするほど冷たい。でも、同じ村の出とか、共通の友人がいるとか、

そうした人間には、本当に寛大で温かいの。たとえば、ある村から誰かが都市に出てきて、そこで成功するとする。その村の人が出てきて、援助を求めたら、彼は手厚くもてなすの。でも無関係な人間が来たら、冷たく追い払う。

上海にいる間に、私には多くの友だちができた。きっとその友だちが、私を助けてくれると思う。私は、中国へ行って、日本と中国との掛け橋になりたい」

健一は目を閉じ、じっと腕組みをしながら、朝の思いを反芻していた。健一は朝を見据えた。

「朝、お前のやりたいようにやりなさい。手始めは、女性のためのクラブを始めるのが最良じゃないだろうか」

「私もそれを考えていたの。中国には、アメリカに留学をしていた女性がたくさんいる。彼女たちの集まることができる社交クラブがあれば、友情は広がって行くはずだわ」

「だがそれには資金がいる。本当は軍に相談すべきなんだろうけど、きっと朝は嫌だろうね」

「ええ、軍に頼りたくない。資金なら上海の友人が援助してくれるはず」

「まあそれでも、軍に相談すべきだろうね。勝手なことをやれば、いらぬ疑いをかけられて妨害される。それよりは事前に報告したほうがいい。朝、軍は悪魔でも悪霊でもないよ。少なくとも彼らは日本語を話す。とにかく正直に話しなさい。先ずはそこからだ」

朝は父の忠告に従い、軍と警察に相談に行った。

警察本部は、朝に中国への通行証を発行してくれた。期間はたったの1か月であったが、それでも構わなかった。

1939年（昭和14）年4月26日、朝は再び、船で上海へと向かった。この時、朝はまだ知らなかったが、結局、この時から6年9ヶ月もの長き間、朝は中国に滞在することになるのである。

50

朝は上海に到着すると、ブロードウェイ・マンション・ホテルで荷をほどいた。8階の部屋からは、眼下に、黄浦江を望めた。

何艘ものジャンク船が、運河を行き交っている。よく見ると、帆は継ぎ接ぎだらけで、満足に風を受けられないのか、苦力たちが必死にオールを漕いでいる。いくつものサンパン船——平底の木造船が、食料品などを山と載せて進んでいる。8階まで匂いが届いてきそう。サンパン船の多くは、川岸から苦力たちがロープで引っ張っていた。彼ら貧しい労働者が、この街を動かしていた。

朝は手始めに、上海から陸路を南京へと向かった。日本大使館に行くためだ。

朝は、アメリカに留学していた中国人のサロン「アメリカ留学生クラブ」を作る考えだった。それには、南京にある陸軍警察所長の許可が必要だった。幸運にも署長は理解ある人物で、あっさりと許可が出た。だが、海軍の上層部は一貫して難色を示していた。軍のサポートがなければ、資金的な援助は見込めない。

困った朝に手を差し伸べてくれたのは、大阪商船会社（現・商船三井）の村田省蔵社長だった。のちに、逓信大臣兼鉄道大臣を務めた大物である。朝は知り合いを通じて村田社長という知己を得ると、自分の計画を包み隠さず打ち明けた。村田社長は尽力を約束してくれた。

のちに、朝は共通の知人からこう教えられた。

「村田さんが驚いていましたよ。『私もいろんな経験を積んできたが、あんなにも他国との友好関係の必要性について熱心に説く女性は、初めてだよ』と漏らしていたほどですから」

村田社長の影響力は絶大だった。実際、氏は軍関係者や外務省関係者に強く働きかけてくれた。海

軍は相変わらず無視していたが、陸軍警察はさらに一步踏み込んだサポートをしてくれたのだ。南京のメトロポリタン・ホテルのそばに、クラブにちょうどいい家があることを教えてくれたのだ。中国では、家を借りること自体、非常に難しいことだった。

日本大使館も協力的になった。

当時の大使は、本多熊太郎外交官だった。氏は、小村寿太郎外相の秘書官として、日露戦争のポーツマス講和会議に随行した人物だった。のちに、東條英機内閣の外交顧問に就いた人物である。

眼鏡をかけた本多大使は、非常に小柄な人物だったが、その目は、すべてのものを射貫くかのようだった。朝は大使に、中国に来た目的を話した。

「よろしい。喜んであなたのお手伝いをしましょう。確かに、日本と中国の人々が友情を深める必要はあるでしょう。あなたのいう中国人女性向けの『アメリカ留学生クラブ』ができれば素晴らしいことです。実際、中国人は、友情を重んじます。ひとたび友情関係が築かれると、彼らはそれを一生大切にします。たとえ、日本と中国が戦争中であっても。多くの中国人にとっては、戦争は国同士が行っている過ちであり、個人の問題ではないと考えているのです」

本多大使は、財政援助を申し出たばかりでなく、朝のために、大使館の1等書記官である清水薫三氏をつけてくれた。

「清水くんは中国をよく知っているし、中国人からも信頼されている。いろいろなことは彼に相談するといいでしょう」

51

あとは始めるだけだ。朝は思った。

外務省と陸軍警察の協力を得られたとはいえ、やはり自分で動かなければどうにもならない。

確保した家は、南京国民政府のトップ（行政院長）の汪兆銘公邸からわずかわンブロックのところにあり、通りには、南京国民政府の要人や、日本の外務省や軍の公館の家が建ち並んでいた。元々の建物は、かつてテキサスの石油王だった男が建てたという触れ込みで、ドイツ様式で建てられた3階建ての邸宅だった。1階には大きなホールがあり、50人がいっぺんにダンスしても大丈夫そうな広さだった。

朝の最初の仕事は大掃除であった。朝は、積極的に身体を動かした。朝は、アメリカ留学時代、博物館のペンキ塗り替えを担当したことがあった。その経験がここで役に立った。壁や床、天井を洗って綺麗にし、床にはワックスを掛け、壁や天井は新しく鮮やかなグリーンに塗り替えた。芝生を整え、スミレの植え込みを作ると、庭には紫のカーペットが出現した。庭には、アメリカ留学生クラブの会員たちの子どもが遊べるように、ブランコなどの遊具を設置した。

陸軍警察は、家を用意してくれるだけでなく、ちょっとした贈り物まで用意してくれていた。贈り物は、家具だった。それも、パール・バック女史の使っていたものだった。

幼い頃から中国で育ったパール・バックは、一時期、大学に進むためにアメリカに帰国するも、宣教師として再び中国に戻って暮らした。南京大学の教授だったアメリカ人と結婚し、自身も中国の大学で英文学を講義する。こうした中国での体験や見聞を元に描いたのが、1931年に発表された長編小説『大地』である。この小説は大ベストセラーとなり、翌1932年にはピューリッツァー賞、1938年にはノーベル文学賞を受賞する。パール・バックは1934年にすでに中国を離れていたが、その家具が残されていたのである。

チーク材の棚に、紫檀の書き物机、そして15分おきに長さの異なるメロディーを奏でるウェストミンスター時計。朝にすれば、パール・バック女史の思い出の品を使うことは誇らしくもあったが、中国人のために設立するクラブに、日本の陸軍から贈られた品々を置くことには複雑な思いがあっ

た。日本軍は中国に攻め入っているのである。その日本軍から贈られたとなると、クラブに来た中国人たちは何と思うだろうか。

朝の暗澹たる気持ちを余所に、多くの中国人の友人たちの協力を得、「アメリカ留学生クラブ」のための準備はつつがなく進んだ。

特に中心となって協力したのは、南京国民政府の要人、江亢虎だ。カン・フー博士と呼ばれていた氏は、かつて中国国民党を結成し、左翼運動に傾倒した。だが彼の考える社会主義は、マルクス主義のそれではなく、国家社会主義とも言うべきものだった。むしろ、アメリカ合衆国の民主主義的なやりかたを尊敬していて、その意味で、「アメリカ留学生クラブ」に大きな関心と賛意を示してくれていたのだ。

カン・フー博士は、南京国民政府の国民政府委員、考試院副院長の要職にあり、中国に対して影響力を持っていた。朝は、氏の協力の申し出を快く受け取り、「アメリカ留学生クラブ」の会長に就任してもらった。クラブには、中国語で書かれた「アメリカ留学生クラブ」という看板が取り付けられたが、これを揮毫したのは、江亢虎その人である。

歓迎レセプションには、中国人だけでなく、清水薫三1等書記官や、のちに青山学院大学の院長になった阿部義宗牧師も駆けつけた。多くの招待客が子ども連れだった。招待客からもらった掛け軸に、朝は目を奪われた。掛け軸には「新約聖書」マタイ伝の19章が書かれていた。

〈子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである〉（日本聖書協会）



南京児童学園の庭で開催された園遊会

朝は、レセプションに集まって来た子供たちを見た。手を差し伸べなくてはならないのは、彼らだ

った。貧しい子供たちは、まったく学校に縁がない。こうして集まって来ている上流階級の子供たちも、学校の授業が早く終わってしまうので、1日の時間を持て余していた。

子供たちのための居場所を作ろう。

朝は、「アメリカ留学生クラブ」が立ち上がったばかりだというのに、学校作りに動き出した。名づけて「南京児童学園」。

となると問題は先生の確保だった。朝は、南京中を駆け回って、良い教師を捜し回った。学園を開けば、来るであろう子供は40人。「アメリカ留学生クラブ」と「南京児童学園」の両方を運営するためには、少なくとも10人のスタッフが必要だった。

朝は幸運にも、4人の素晴らしい教師を雇うことができた。さらには、英語が話せるコック——皆から「ダースフ」と呼ばれていた——、そして信頼できるメッセンジャーボーイをスタッフに加えることができた。

事はうまく動き出したように思われた。

「アメリカ留学生クラブ」の人気も上々で、毎日午後になると、「南京児童学園」に子供たちが大勢集まって来た。歌をうたい、ダンスを踊り、読み書きを習った。夕方4時になると、お茶とお砂糖のボンボンが振る舞われた。日本製のお菓子を、中国の子供たちはことのほか好んだ。



南京児童学園でのおやつ時間

問題は、母親の側にあった。

「南京児童学園」は、あらゆる階級の子供たちがごちゃまぜになっていた。ところが、上流階級の子供たちと、下層の子たちとの言葉遣いが違った。どの時代も、子供たちは面白い言葉や、汚い言葉を拾い出す。上流階級の子供たちが、下層の子の話す言葉を真似るようになってしまったのだ。

当時の中国は、上流階級と下層とで圧倒的な壁があった。上流階級の中国人にとって、自分たちは西洋人たちと同じようなステイタスだと思っている。西洋人にとっては、多くの中国人は眼中にない。召使いか何かとしか思っていない。必然的に、上流階級の中国人——ほんの少数のエリートは、下層の中国人——大多数の中国人を蔑視した。

上流階級に問題がなかったわけではない。彼らは一夫多妻が当たり前で、エリートになればなるほど、妻の数が増えた。ある南京国民政府の大臣の家庭には、48人の子供がいた。それだけの内妻を抱えていたのである。

朝は仕方なく、上流階級の子供たちが通う日と、そうでない子供たちの通う日を、交互にした。そ

うしたかったわけではないが、仕方がない。

新たなシステムが落ち着くと、学園もクラブもスムーズに回り出した。

朝は、自分が間違っていなかったことを確信していた。

中国人たちは朝を信頼し、友情は日に日に厚くなっていった。南京に戦争の影はなく、朝はいつときの幸せを満喫していた。

大変だったのは4人の教師で、日々、増えていく学園の子供たちに追われて、いつも忙しそうにしていた。しかしその忙しさとて、皆に充足をもたらすものだった。



南京児童学園の子ども達が庭で遊んでいる様子

52

朝が、中国にやってきたのは1939年の春だ。

やがて訪れた、湿気が高く蒸し暑い夏にも閉口したが、それでも、厚手のゴザを外壁に取り付けることで、幾分、暑さは和らいだ。

秋が過ぎ、冬がやってくると、夏の暑さがかわいく思えるほど、街は凍てついた。

ある日、朝が南京の街を歩いていると、何かぐにやっとした柔らかい物を踏みつけた。ぎょっとして靴の下を見ると、それは人間の指であった。凍傷でもげたのだろうか。道端に人の指が転がっていたのである。

家もなく、行く当てもない人は、道端で蹲る。冬の寒さは彼らを襲うのだ。命を落とした人も少なくないだろう。

朝の知り合いに、教会でボランティアに勤しむヤン牧師がいた。ヤン牧師によれば、毎年、アメリカから船で救援物資が届くのだという。ボランティアが、その物資を、孤児や浮浪者に配るのだが、ヤン牧師はそのボランティアの監督責任者を務めていた。

「困ったことに、南京の寒さは、秋の終わりから4月まで続きます。もし、誰かが孤児や浮浪者を助けなければ、きっとこの地域の犯罪は爆発的に増えるでしょう。盗みでもしなければ、彼らは寒さと餓えで、のたれ死ぬしかないのです」

朝は、ヤン牧師に頼んで、スラム街を案内して貰った。

朝は息を呑んだ。中国をわかったつもりになっていたが、そこは、この世とは思えないような荒んだ有様だった。子供も老人も生気をなくし、道端に座り込んでいた。目にはわずかししか光が残っていない。

朝は知ってしまったことをそのまま放り出しておくことができなかった。

朝はスラム街の外れに、大きな一軒の空き家を見つけた。ヤン牧師に取次を頼むと、牧師は家主に説明した。

「私の日本の友人が、この家を借りたいと言っています。彼女は、この地域の貧しい人たちを助けたいと言っています」

夜になって、家主が朝の元を尋ねて来た。

「あの家は、かつて寺院として使われていました。この地域から金持ちが大挙して出て行ったあと、僧侶も一緒によそに移ったのです。以来、誰も住んでいません。家具もなく、床も朽ちています」

「それでもかまいません。私には、100人ほど収容できる建物が必要なのです。そこで毎日、困っている人たちにお昼をふるまいたいのです」

家主は大きく頷いた。

「わかりました。あなたにお貸ししましょう。ただしすぐに準備が必要です。気温がこれ以上下がる前に、キッチンを整備すべきでしょう。暖炉がありませんから、中国式のキッチンを作られるといいでしょう」

家主は親切にもいろいろとアドバイスをしてくれた。ヤン牧師は、自分の教会の人員をひとり差し向けてくれた。米の炊き出しなど、これまでも経験しているワンという青年だった。

朝は意を決して、軍に頭を下げに行った。ここならば、兵隊用の大きな鍋を持っているとふんだからだ。

軍関係者に相談すると、居合わせた兵隊たちがおかしそうに笑った。

「今では、軍は大きな鍋で炊きません。皆、自分用の飯盒を持っていますから。ただ、古い鍋でよろしければ、ひとつ大きな鉄鍋がありますよ。もう使うこともないので、差し上げましょう」

ワン青年は、石とセメントで、器用に暖炉を作った。その上に、鉄鍋を置いて、ご飯を炊くのだ。暖炉では、河岸で刈った雑草を乾燥させ、それを火にくべた。

朝はさらに、食券を用意した。30回分がひとまとめになったもので、1回利用するとパンチを入れる。こうしておかないと、1日に何度も並び人が出てきてしまうのだ。お腹を空かしている人たちは余りにも多く、全員に行き渡らせるためには、こうするほかなかった。

こうして「施粥廠」はスタートした。

しかし朝は、オープニングの日の中に入ろうとしなかった。誰にだって誇りはある。日本人に施されていると知ったら、あまりいい気はしないと考えたのだ。

外でウロウロしていると、それを見つけたヤン牧師が、朝を手招きした。

「私が中に入って、大丈夫ですか？」

「もちろんですとも。誰もが、このお米を買って用意してくれたのが、日本のレディだと知っています。そして、皆とても感謝しています」

「すごい混雑ですね」

「これでも全員じゃないんです。今日は、65歳以上の女性だけに限定して配っています。明日は10歳以下の子供の日です。日によって、変えるようにしています」

施粥廠の中は、鍋から上がる湯気がもうもうと立っていた。

立ち働いているのは、ワン青年だけでなかった。多くの人たちが、忙しく動き回っていた。

「あの方たちは？」

「ああ、あそこに見えるがっちりした男性、あの男は魚市場のオーナーです。『もし日本のレディが俺たちの国の人間を助けることができるというなら、何もせずただそっくり返って座ってなんかいられないよ』と言っていました。ほらあそこにちょっと小太りの男が見えるでしょ？ 彼は、人力車を組織しています。『南京児童学園のことも聞いたよ。あの人は真の素敵なレディだよ。だから助

けに行かなきゃいけないと思ってね』と言いに来ました。皆、あなたのことを知って、駆けつけてきてくれたのです」

朝はぐっと手のひらを握りしめた。

皆が、異国人である私のことを理解してくれている。これこそ自分がやりたかったことなのだ。日本は今、中国に攻め込んでいる。でもそれは、決して日本人全員の意志じゃない。朝は、そのことを知って欲しかった。そう思って中国に来た。

「わかってくれた……」

朝は、これほどまでに自分が報われたと感じたことはなかった。



食券



施粥廠

施粥廠を運営するには、資金繰りに苦勞がいったが、それでも何とか続けていた。

ある日、お米の入った袋を担いだ男が、施粥廠を尋ねて来た。たまたま居合わせた朝が対応した。

「どうしましたか？」

「どうか、私に炊いたご飯を分けてくださいませんか？ 代わりにこのお米を差し上げますから」

「なぜです？」

「私の妻が今日、赤ん坊を産みました。私たち中国にはこんな諺があります。もし、何か良い行いをすれば、新しく誕生した赤ん坊が裕福に育つてね。だからお米を寄付しようと思って来たんです」

親切をすれば、親切が返ってくる。

朝がアメリカで学んだ知恵だ。それが、中国でも諺になっているなんて！

朝はすぐに、お椀いっぱいのお粥を男に差し出した。

すると今度は、腰の曲がった老婆がやってきた。

「もう6日間も何も食べていないのです」

老婆は8キロ先の街に住んでおり、食券を持っていなかった。周囲に「あそこへ行けば何とかなる」と言われて、8キロの道のりを這うようにやってきたのだった。

「あの人に先ず、お茶をあげて」

老婆は、立て続けにお茶を10杯、飲み干した。続いて重湯を5杯、流し込む。老婆の弱った胃が受け付けるかどうか、火傷しないかどうか、朝は心配だったが、それでも老婆は、すべて食べ終える

と、すくっと立ち上がった。

そしてすぐさま、跪き、両手を前に投げ出し、額を床に擦りつける。老婆はその礼拝を3回繰り返した。

「どうなされたの？」

「命を救ってくださったからです」

そう言うと老婆は去っていった。

あとになって、ヤン牧師が中国の習慣なのだと朝に教えてくれた。

「私に、お礼は必要ないのです。私がやりたいと思っていることをしているだけなのですから。もし、この人たちをお助けできるなら、そしてそこから友情が生まれるなら、それこそが私の望むことなのです」

朝がそう告げると、ヤン牧師は笑って頷いてくれた。

朝はここ南京で、中国と日本の関係に一筋の光を見出していた。



(上) 10歳以下の子ども達が食べる日の様子 (下) 65歳以上の女性達の日

松岡朝物語(仮称) 第11回

第11回 絶望——両国のはざままで

文/角山祥道

53

1941年(昭和16)の12月、松岡朝はその日、南京のホテルに滞在していた。

8日の朝、ホテルの部屋の電話がけたたましく鳴った。朝が出ると、「ヤン牧師が至急、松岡さまにあいたいとロビーにいらしています」というフロントからの電話だった。

朝が急いでロビーに降りていくと、ヤン牧師が駆け寄ってきた。彼は、ほとんど困りきった表情だった。

「ラジオが今朝、アメリカと日本が戦争状態になったことを発表しました。それであなたにお知らせしようと、人力車を二人がかりで急いでやってきました」

朝早くラジオでニュースを知ったヤン牧師は、急ぎ朝に知らせるべく、人力車を引かせるだけでなく、もう一人に後ろから押させたのだという。ひと息ついた牧師は、今度は落ち着いて言った。

「日本人が戦争を始めてしまったのです」

朝は立ったままでいられなくなり、そのままロビーにある椅子にドスンと腰を下ろした。

「一体全体、どうしたらそんな無責任で、無茶なことができるのでしょうか？」

1941年12月8日、日本時間午前1時30分。

この時、現地ハワイは、7日、日曜日の午前6時。キリスト教の安息日だった。日本軍は、太平洋におけるアメリカ最大の海軍基地、ハワイオアフ島の真珠湾に奇襲攻撃を仕掛けた。アリゾナなど戦艦4隻、航空機188機を破壊するなど、アメリカに大損害を与えた。

日本時間午後7時。ラジオは臨時ニュースを報じた。

〈臨時ニュースを申し上げます、臨時ニュースを申し上げます、臨時ニュースを申し上げます。〉

大本営陸海軍部十二月八日午前六時発表、帝国陸海軍は本八日未明西太平洋に於いてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり。

大本営陸海軍部十二月八日午前六時発表、帝国陸海軍は本八日未明西太平洋に於いてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり。

なお今後重要な放送があるかも知れませんから聴衆者の皆様にはどうかラジオのスイッチをお切りにならないようお願いいたします)

この日は、一日中臨時ニュースが流され、ニュースの合間には、勇ましい曲がかかった。

〈さうだ一億火の玉だ 一人一人が決死隊 がっちりくんだこの腕で まもる銃後は鉄壁だ 何かなんでもやり抜くぞ〉(「進め一億火の玉だ」)

朝の嘆きや、ヤン牧師の困惑をよそに、日本は喝采の声で溢れていた。知識人として例外ではない。〈頭の中が透きとおるような気がした。世界は一新せられた。時代はたった今大きく区切られた。昨日は遠い昔のようである〉(高村光太郎)

〈私は急激な感動の中で、妙に静かに、ああこれでいい、これで大丈夫だ、もう決まったのだ、と安堵の念が湧くのを覚えた。(中略)方向をはっきりと与えられた喜び、弾むような身の軽さがある、不思議であった〉(伊藤整)

〈切っばつまってたのが、開戦ときいてホッしたかたちだ〉(古川ロッパ)

〈老生ノ紅血躍動!〉(斎藤茂吉)

〈しめ切った雨戸のすきまから、まっくらな私の部屋に、光のさし込むように強くあざやかに聞えた。
(中略) 日本も、けさから、ちがう日本になったのだ〉(太宰治)
〈眼頭は熱し、心は静かであった。畏(おそれ)多い事ながら、僕は拝聴していて、比類のない美し
さを感じた〉(小林秀雄)

朝は、葉山であった金子堅太郎伯爵のことを急に思い出した。伯爵は何年も前に、日米間が危機的
な状況にあることを口にしていて。

軍や外交官は、アメリカの持つ大きな力について、何の知識もなかったのだろうか。アメリカ人の
気質をわかっていなかったのだろうか。

朝に自明なことが、日本の政治家や軍人にはわかっていなかったのだ。

54

朝はすぐに、ヤン牧師とともに、車で南京市内を回った。南京には国民政府があったが、この地を
実質支配しているのは、日本軍だった。アメリカとの戦争が始まった今、南京に滞在しているアメリ
カ人に身の危険がおよぶ恐れがあった。

二人は、市内の大学を回り、知人のアメリカ人を見つけると、
「私は日本人ですが、あなたたちのために、何でもお役に立てることはしますよ」
困ったら連絡するようにと、声をかけて回った。

帰りの車の中で、朝は絶望の中にいた。

日本と中国の間に友好関係の種をまこうとしている、このごく小さな計画が、頓挫しようとしてい
る……。大きな戦争が始まってしまった今、これから何をすればいいのか。

「私は何も成し遂げていないのに……」

戦争の報を受け、朝を支えてくれていた本多熊太郎大使も、即刻辞任した。大使は、以前から日米
開戦には反対で、平和的解決を見出すべく、外交的手腕を發揮しようとしていた。彼には信念があっ
た。朝を歓迎し、援助したのも、彼の信念と朝の思いが重なるところがあったからだった。

大使は常々、口にしていて。

「もしアメリカが戦争に参戦しようものなら、日本はもう終わりですよ」

朝は、帰国する本多大使に挨拶に行った。大使は達観した顔をしていた。
「ご存知のように、私は軍の政策に反抗してきました。ここで武力以外の別の解決策を見つけようと
していた私の試みを、真珠湾攻撃が、終わりにしてしまいました。でも、あなたの働きは、今後、今
までより一層必要とされるでしょう。だから全力を尽くしてください。私はここにいるお役人たちに、
出来る限りあなたを助けるように言っておきましょう」

本多大使は、のちに駐イタリア大使に転身した日高信六郎在華大使館参事官や清水薫三等書記官
など、何人かの外交官の名前を朝に伝えた。

本多大使は、南京航空基地より、飛行機で帰国した。

日米開戦に反対していたのは、本多大使だけではない。

南京にいた朝の元に、松山常次郎氏が訪ねて来た。松山氏は、朝の父・健一と同郷の和歌山の出で、
また熱心なクリスチャンということもあり、朝は松山氏と父を通じてつきあいがあった。氏は衆院議
員の職にあり、開戦直前には、キリスト教平和使節団を組織して渡米。日米開戦の回避を図るなど、
ギリギリまで努力を続けていた。

「アメリカはどうでしたか？」

「私たち日本人クリスチャンたちは、アメリカへ行き、さまざまな教会の組織の人たちに会いに行きました。でも駄目でした。私たちは理解し合うための基盤を広げようとしていたのに、日本はアメリカに宣戦布告してしまったのです」

「でもだから今こそ」と松山氏は話を続けた。

「日本と中国の間でも戦争が激しくなっています。戦線はどんどん広がってきているのに、政府も軍部も何もしようとしない。自分はただ無駄に過ごしたくありません。今こそ、日本人のクリスチャンは立ち上がって、殺し合いをストップするために、何かを始めなければならないのです」

松山氏には腹案があった。

「私は、蒋介石将軍が敬虔なクリスチャンであること、そしてまた蒋介石夫人もアメリカで勉強されたことを思い出したのです。先日、北京へ行き、蒋介石に洗礼を授けた中国人牧師にもお会いしました。私は、日本と中国のクリスチャンたちで静かな修養会を開くことを計画しています。私たちにとって神は唯一です。将軍もそれは同じはず。日本人と中国人のクリスチャンが共に語らう場があれば、私たちはきっと共通の基盤を見つけられます。話し合いで戦争を鎮めるのです、そうすれば中国とのこの愚かな戦争は直ちに終結するでしょう」

朝は首を振った。中国大陸で展開する日本軍の頑なさを、朝は身を以て知っていた。たとえ衆院議員とはいえ、松山氏が軍にそのような申し出をすれば、日本軍の怒りを買うだけでなく、逮捕という結果になることを意味するのだ。朝が懸念を示すと、松山氏は、胸を張った。

「私たちはその危険を冒す覚悟ができています。その修養会のことを勧めれば、上海にいる英国聖公会教会の阿部義宗牧師も参加してくださるでしょう」

「私にどうして欲しいのですか？」

朝は尋ねた。

「この大使館と打ち合わせのお手伝いをしてくださいませんか。そして、陸軍や海軍本部と交渉していただけないか。重慶への飛行機が必要なのです」

「……残念ながら、もう手遅れです。アメリカと日本は戦争を始めてしまいました。開戦前ならば、蒋介石に洗礼を授けた中国人牧師と合同修養会を開こうとなさる、あなた方のお考えは、アメリカや中国に対する大きな平和のアピールとなったでしょう。非常にタイムリーだったかもしれません。もちろんそのあかつきには、私も喜んで参加しました。でも今や状況が変わってしまいました。日本はアメリカとの戦争できっと敗北を味わいます。蒋介石は、現在のこのような状況下では、何もできないと思います。たとえ将軍が日本との戦争をどうにかして終わらせたいと思っけていても、ですよ」

松山氏は反論した。

「私の多くの中国の友人たちは、蒋介石はアメリカから提供された兵器を、日本に対して使用しないと指摘しています。それらは毛沢東らが率いる紅軍（中国共産党が組織した軍隊「中国工農紅軍」）との戦いに使用されたと聞きました。蒋介石はコミュニスト（共産主義者）を嫌っていますし、実際、国民政府は中国共産党と妥協したことはありません」

「中国に悲劇的な分裂が起きていることは知っています。しかし松山さん、彼らは皆、中国人です。汪兆銘と蒋介石は等しく、自分たちの国を愛しています。公然とお互いをひどく非難していても、結局彼ら中国人は、最後に結束するはずですよ。彼らが二つの異なる集団だと考えるのは、間違っています」

朝はきっぱりと自分の意見を述べた。

「正直に申し上げて松山さんをお助けすることはできません」

松山氏は見事なほど頑固な人であり、信念の人であった。松山氏は諦めずに、あらゆるツテを辿り、南京中の日本人と面会し、自説を説いて回った。

数日後、松山氏が朝の元を再訪した。

「松岡さん、あなたは正しかった。私は日本へ帰ります」

氏があまりに意気消沈していたので、朝は帰国前の気分転換を勧めた。

「明日はピクニックにご一緒しましょう。実は、私の姪が北海道出身の歯科医と結婚したのですが、姪夫婦と2人の子供——6歳の男の子と4歳の女の子と、現在ここに来ているのです」

南京の朝の自宅に、姪の初江一家が船でやってきていた。初江は、朝の姉・啓子の長女で、朝は初江が赤ん坊の頃より可愛がっていた。初江はとても利発な子で、やがて仏英和高等女学校（現・白百合学園）に通い、フランス語を熱心に学んでいた。アメリカに留学中、朝は初江のために、せっせと高価なフランス語テキストを購入しては送った。しかし、東京歯科大学の卒業生と恋愛結婚してしまい、小樽に嫁いでしまったのだ。



(左) 初江 (右) 朝

初江の夫の秀夫は軍籍にあり、たまに南京に顔を見せることはあったが、不在がちだったので、初江と6歳の昭斌と4歳の裕子の3人は、南京の朝の家に滞在していた。初江は、中国で一人奮闘を続けている朝を手助けしようと考えていた。

昭斌と裕子は、学園の中国の子供たちともすっかり仲良くなり、中国語で遊んだりしていた。初江はフランス語の短波放送を聞きながら、日本が苦戦を強いられているニュースを逐次通訳し、朝を助けた。そのお陰で朝は、日本軍優勢という偽りの報道——大本営発表に惑わされることなく、真実を知ることが出来た。

朝は松山氏に、その子供たちが中国人の子供たちと、どんなふう遊ぶのか話して聞かせた、彼らは、お互いの国が戦争しているにもかかわらず、仲良くおしゃべりしたり、中国語で喧嘩したりするのだ。

「4歳の女の子——裕子と言う名なのですが、裕子が、この季節に愛らしい花を咲かせる、沼の浅瀬から取れる蓮の根っこが欲しいと言っているのです」

中国の子供たちは、蓮の根をよく洗い、薄くスライスすると、その穴に紐を通して、ネックレスの

ように首にかけているのだ。

「彼らのおやつなんです。ネックレスから取り外しては、噛み噛みして食べるんです。裕子は、中国人の子供に『キャンディと交換してくれる?』と頼んだそうなのですが、誰も『いいよ』と喋ってくれなかったらしくて。だから、裕子と、一緒に公園の池に行こうと約束していたんです」

松山氏と朝、そして4歳の裕子は、公園でしばしの余暇を楽しんだ。公園では、蓮の根を採るだけでなく、池に舟を浮かべ、のんびりと揺られた。重苦しい空気がいつときだけ、朝の頭上から払われた。

翌日、「ありがとう」と言い残して、松山氏は希望を見いだせぬまま、日本へと帰っていった。

55

「アメリカ留学生クラブ」や「南京児童学園」に対しても、軍部の締め付けは厳しくなっていた。特に日本海軍の軍人たちは、朝のことを快く思っていなかった。

ついに海軍将校が踏み込んできた。

「これが『アメリカ留学生クラブ』と呼ばれている会か」

「その通りです。理事長は、南京国民政府のカン・フー博士にお願いしております。カン・フー博士は無給で請け負ってくれています」

「ここで何をやってるんだ」

「一種の相互交流です。講演会を開いたり、園遊会を開催したりしています。ここは多くの人たちが出会う場なのです」



アメリカ留学生クラブでの講演会 講師は清水薫三（外務省一等書記官）

「もう必要ない。ただちにこの組織を解散するように」

仏頂面の海軍将校は、そう言い残すと、踵を返して出て行った。

朝は、「アメリカ留学生クラブ」から1ブロック先に海軍本部が設けられていることは知っていたが、そこを訪れたことはなかった。このままでは、わずかな救いまで無くなってしまう。朝は意を決

すると、海軍本部に向かった。手には、租界で手に入れた高級ワインと舶来のタバコを持って。

納得したわけではなかったが、海軍は朝からの贈り物に対し、「しばらく様子を見る」と態度を変えたようだった。

「アメリカ留学生クラブ」の存在は、次第に中国人の間でも、信頼たるものとして認識されるようになっていた。でなければ、セオドア・ショオ博士が訪ねてくることがあり得るはずがない。

ショオ博士は、ニューヨークに留学し、弱冠22歳で博士号を取得したという秀才だった。氏の話す英語はネイティブと間違えるほどで、一時、北京大学で教鞭をとっていた。現在は、南京国民政府の要職にあった。ショオ博士もまた敬虔なクリスチャンで、蒋介石夫妻とも個人的に親しかった。

年明けの1942年（昭和17）、訪ねて来たショオ博士は、朝の顔を見ると握手を求めてきた。

「私たちは、あなたのことをチェックしていました。あなたは南京へご自分の意志でやって来て、ご自身の費用で中国人の子供や婦人たち、貧しい人たちを援助しているのですね。日本のために、親愛なる友人を中国に作ろうとなさっているのですね。私はあなたの考えに感化されました。たとえ戦時下であっても、中国人と日本人は友人として対話を続けるべきだというあなたの考えは間違っていない。そのことは少なからず、政府にもいい影響を与えるでしょう。国の指導者たちは、むしろ中国人と日本人の交流を奨励すべきです」

数日後、ショオ博士が夜、朝の元にやってきた。

「朝、実は私は、蒋介石將軍の重慶国民政府から、ある人を通じて、特命全権公使に任命されています。私は、中国と日本の平和のために、何かをしたい。私は日本を憎んでいません。日本と協力したいのです」

中国を蹂躪しているのは、日本である。だが蹂躪されている側のショオ博士が、日本の平和のために何かをしたいという。何という寛容の心だろうか。

朝は、カン・フー博士に教わった「論語」の一節を思い出していた。

〈寛なれば則ち衆を得〉（『論語』陽貨第十七）

寛容の心で他者と接すれば、多くの人間の心を得ることができる。

ショオ博士がやろうとしていることは、まさにそれだった。そしてそれは、朝の進むべき道でもあった。

ショオ博士はひとつの提案を持ち込んできた。

重慶に行って、蒋介石に提案したいというのだ。

日本軍によって首都・南京が攻略された際、蒋介石ら南京国民政府は、首都を捨て武漢に移り、さらに重慶に移動していた（重慶国民政府）。日本軍は勝手に、「国民政府を相手とせず」と宣言し、中国国民党の反蒋介石勢力であった汪兆銘を担ぎ、新たに「南京国民政府」を樹立し、専らこの政権を交渉相手としていた。この事は国際的にも認められず、日本は各国の反発を受けていた。

日中戦争を終わらせるためには、汪兆銘と交渉したところで埒が明かないのは道理である。日本軍の交戦相手——蒋介石との対話が必要だった。父親の代から蒋介石と近い関係にあり、かつお互いにクリスチャンというショオ博士は、蒋介石と独自のパイプを持っていたのだ。ショオ博士は、蒋介石將軍に戦争終結の手立てを説く手紙を渡そうと考えていた。

とはいえ、南京から大陸内部の重慶までは距離にして約1400キロ。激戦の中を重慶まで行くのは、自殺するようなものだった。ショオ博士は、朝に、日本軍への取次を頼んできたのだった。

ショオ博士のアイデアは、蒋介石に会う、というだけではなかった。一方を説得しただけでは、戦

争は終わらない。博士は、同様の内容のものを、日本軍にも渡そうと考えていたのだ。

朝は、ショオ博士と一緒に、英語でやり取りをしながら、3日かけて日本語に書き起こした。それはこんな内容だった。

〈中国との戦いは8年間も続いており、日本は資源も足りていない。この状況を解決するアイデアも方針も持ってはいない。

この戦争終結の唯一のそして最良の方法は、天皇陛下の高潔な意図を中国人の間に広めることである。天皇陛下が直接、中国の民衆に向かってメッセージを送れば、中国人も満足するはずである。メッセージは以下のような内容を入れるべきである。

1. 大陸における8年間の闘いによる中国人の痛みに寄り添うこと。
2. 中国の将来のために、天皇陛下が「中国政府統一の実現を真剣に希望する」ことを明言し、日本政府もそれに協力すること。
3. ただちに、日本軍は大陸から引き上げること。
4. 今後日本は、第三国で戦闘をしない、ということ。

これらのコメントを、中国全土の人民に向けて、天皇陛下が自ら述べられれば、重慶の蒋介石も、延安の毛沢東も、過去のことは水に流して、中国統一で手を結ぶだろう。このメッセージによって、お互いに面子が損なわれることはない。

日本が中国統一のために骨身を惜しまず、かつ平和な解決を用意していることを知れば、中国人は日本に対して親しい感情を抱き始めるだろう。現在は満州において、ソヴィエトが攻め込もうとしているが、中国が親日に転じればうかつに攻め込めない。だがこのままでは、ソヴィエトは満州にいずれ攻め込み、満州の中国人はパルチザンとなってソヴィエト軍と共に戦うであろう。

天皇陛下のメッセージが実現し、つつがなく履行されれば、中国の4億の人民は、日本の天皇を信頼し、その行動に感謝するだろう。さすれば、アメリカと中国との関係は崩れ、今のようにいかない。日米戦争にも影響がもたらされる。

私たち中国人民は、中国の統一と安定を心より望んでいる。国民党と共産党の間の泥沼の争いは、心配にはおよばない。中国は近代国家に発展していく途上にある。

この戦争に、日本軍が中国の国内分裂を画策したり、利用したりすることは、あってはならない。中国人民はそれを望んでいない。

将来の中国統一には、アメリカ、ソヴィエトが絡んでくるだろう。統一されたあかつきには、日本は中国での足がかりを失うだろう。

将来の中国の政治システムは、蒋介石による独裁体制を承認しないであろう。国民党は中国政府の中にとどまるかもしれないが、国民党独裁体制は不可能だ。現在の国民党の政治家たちは、中国の未来を担おうというスピリットを持っていない。一方、毛沢東率いる延安党は活気があり、新しい空気に溢れている。延安党が今後、中国の未来建設のための動力になっていくはずだ。

中国と日本との間にある問題は、諸外国の干渉を許すことなく、二国間で解決されねばならない。もしこの提言が実現されるならば、日本をその深刻な立場から救うだろう。そして、中国は外国の勢力による干渉から解放されるであろう。最近ひどくなっている日中関係は、この提言の実現によって、元の状態に戻る。これは中国と日本の平和な関係への第一歩なのだ。将来の中国と日本の平和共存を私は信じている)

朝は、かねてより振る舞いが紳士的だと感じていた、陸軍警察の大塚中佐の元を訪ねた。

「中佐、あなたからお叱りを受けそうなことについて相談させてください。私は何としても、今すぐにこの戦争終わらせたいと思っているのです。戦いは何の益にもなりません。どのようにお考えでしょうか？」

中佐はしばし考え、口を開いた。

「私たちも、特に戦いたいと思っているわけではありません。しかし、この状況を変えるには、これしか方法がないのです。他に手立てがありますか？」

朝はその言葉に、勢い込んで答えた。

「もしそれを実行する方法や手立てがあるとしたら、私の意見にご賛同いただけますか？」

「結構ですよ。喜んであなたをお助けしましょう。詳しく話してください」

朝はひと息つくと、続けた。

「実は、私には以前からショオ博士という知り合いがおります。彼はニューヨーク大学を卒業し、博士号を有しています。北京大学では大学教授をしていました。今、ショオ博士は重慶へ行きたいと強く希望しています。彼の父親は蒋介石將軍とコネクションをお持ちです。他にも重慶に、影響力のある良い友人をたくさんお持ちです。多分その方たちは彼に手を差し伸べるでしょう。

ショオ博士もまた、戦争を望んでいません。早く終わらせたいと思っています。ショオ博士は平和のための献策を蒋介石將軍に進呈し、將軍を説得しようと考えているのです」

「それはたいへん興味深いですね。私自身、彼に会って、直接話したいですね」

朝はすぐさま、大塚中佐とショオ博士の会談をセッティングした。電話では誰かに聞かれる恐れがあったので、メモで日程のやり取りを行った。

会談は朝の自宅で行われた。2人きりの会談だ。

1時間もすると、大塚中佐が先に部屋から出て来た。

「松岡さん、素晴らしいですよ。私は彼の申し出に心から賛成です。ただし慎重にせねばなりません。せっかくのいい申し出も、小さい木から飛ばしたのでは遠くまで飛びません。私は、大きな木から飛ばしたい。ですから松岡さん、私に2、3日猶予をください。私にできる最良の方法を考えますから」

3日後、大塚中佐が尋ねて来た。

「大きな木から鳥を飛び立たせようと、全力を尽くしました。任せてください。ショオ博士の重慶までの費用もこちらで負担します。それから、松田という軍警察の兵士をひとり、博士に付けます。彼が同行すれば、憲兵たちがいる鉄道のチェックポイントもうまく通過できるでしょう。重慶に入ってから、同行できませんが、その代わりに、重慶周辺の避けるべき戦闘地帯や危険地帯を記した地図を作りました。遠回りのルートですが、この通り行ってもらえれば、辿り着けるはずですよ」

大塚中佐と若い兵士の松田、そして朝、ショオ博士の4人は、綿密な打ち合わせを重ねた。

命の危険のある重慶行きである。軍服姿の人間との打ち合わせは、重い雰囲気となった。そこで、他の子供たちと遊んでいる裕子を、会議をしている応接室に呼び寄せた。歌を歌ってもらうためである。幼子の歌う「かもめの水兵さん」や「七つの子」は、軍人にとって久しぶりに聞く童謡だった。裕子のかわいらしい歌声は、随分、その場を和ませた。重慶行きの計画は、次第にまとまっていった。

もうひとつの難題は、日本軍の幹部にショオ博士の提言を手渡すことだった。できれば、ショオ博士の手自ら。

朝は、意を決して陸軍本部に乗り込んだ。朝の必死の説明に、支那派遣軍総司令官——將軍自ら会ってくれることとなった。面会は、重慶に出発するその日の朝5時だった。

朝とショオ博士は、將軍の自宅玄関のチャイムを鳴らした。外はまだ仄暗く、お互いの顔がはっきり見えなかった。

側近がドアを開ける。応接室に通されると、將軍はすでに、軍服の正装で待っていた。

ショオ博士は、自分の身分と目的を説明し始めた。

「私は今夜、重慶へ出発いたします。もし、蒋介石将軍に何かメッセージがありましたら、私がお伝えすることができます。彼に極秘に近づくのはたいへん困難ですが、私には良い友人がおりまして、その彼を通じて、確実に手紙を渡すことができます」

ショオ博士は、戦争を終わらすための手立てを説明し、将軍に提案書を手渡した。

将軍は提案書を一瞥すると、中身も開かず、こちらに向き直った。

「私は中国で戦争をするためにおります。重慶と和平交渉するためではありません。私は一兵士であります。なぜ敵に手紙など書く必要があるのでしょうか」

それだけだった。

ショオ博士は立ち上がり、

「本日はお会い頂き感謝いたします。失礼」

と言って、部屋を出た。私も一礼すると、急いで博士のあとを追った。通りに出て博士に追いついたが、朝の自宅に着くまで、一言も交わすことはなかった。ショオ博士は立腹していた。

「あの将軍は日本にとっての最大の好機を失ってしまいました」

「大使館もこれに関しては、何もできないと思います」

朝が申し訳なさそうに言うと、ショオ博士はぶっきらぼうに言葉を投げた。

「もし、日本がどうにかしたいなら、私がしますよ。それまでベッドに入って眠ります」

出発するその日の夜、朝とショオ博士は一緒に食卓を囲んだ。

ショオ博士は夕食とは別に、コックに40個の卵を頼んでいた。卵は、茶の葉と塩と一緒に茹でられており、茶葉の良い香りが漂っていた。道中の保存用塩漬け卵だった。朝は饞別に、甘い物好きのショオ博士にキャンディを手渡した。

突然、ショオ博士が大声で泣き出した。博士は多くのものを背負っていた。

朝はショオ博士に語りかけた。

「日本が交渉のチャンネルを開く機会をつかむことがなかったことを、非常に残念に思います。私は単なる一人の教師に過ぎません。私は誰かに頼まれたからやっているわけではありません。私が出れることは多くありませんが、私は平和を諦めていません」

ショオ博士は顔を上に上げた。

「私たち中国人は、あなたがここで、たった一人で頑張って努力なさっていることに、感謝しています。ありがとう」

迎えに来た護衛の若い兵士とショオ博士は、2人とも雨合羽を身に纏い、小さな包みを抱えて夜の町に出て行った。朝はそれをそっと見送った。

57

1943年（昭和18）。

日本では「玉砕」という言葉が新聞紙面に踊るようになっていた。前年6月のミッドウェー海戦で空母4隻を失った日本は、手足をもがれたのも同然だった。ミッドウェー海戦の詳細は国民に伝えられなかったものの、4月の連合艦隊司令長官・山本五十六の戦死は、マスコミによってセンセーショナルに報じられた。そして、守備隊2500人を失ったアッツ島玉砕（1943年5月）。

「元帥の仇はキット討つぞ」

こう書かれた看板が、街のあちこちに置かれた。日比谷公園で行われた山本元帥の国葬は、日比谷公園まで2キロの道のりを棺が運ばれたが、その沿道は多くの国民で埋め尽くされた。一時、敵討ちのムードは高まったものの、国民的ヒーローの戦死を分水嶺にして、その後、日本は敗戦への道を、

坂道を転がるように転落していく。

国民の多くは大本営発表を信じていたが、日本国内で反戦の動きがなかったわけではない。しかし、そうした動きは、政府が許さなかった。1942年6月、日本基督教会第六部（旧日本聖教会）などに属する96人のクリスチャンは、治安維持法違反容疑で一斉に検挙される。同じ時期に、上海で活動していた反戦グループも検挙された。もはや、戦争反対の声を発することすら許されない世の中になっていたのだ。

1943年6月からは、勤労働員命令により、学徒は学業を休止し、軍需産業に従事させられる（終戦までに300万人の学徒が動員された）。子供も女性も、戦争へと駆り出されたのだ。

そんな中、朝の元に一通の手紙が届いた。
待っていたショオ博士からのものだった、

〈1943年8月31日

親愛なる友へ

私はこれほどのきつい仕事をしたことはありません〉

手紙は、手帳をちぎったような、小さな紙片に書かれていた。手紙が届いたということは、ショオ博士は無事であり、蒋介石に手紙を渡したことを物語っていた。

朝はショオ博士の無事を喜んだ。

ショオ博士のような、平和を希求する中国人がいるのに、戦争は終わらない。どうやったら終わるのか、朝にもわからなかった。中国人と同じ目的を持っていることを確認できたことだけが、唯一の救いだった。

(つづく)

25 点の日本画が豪州首都へ

1977年に当会によって豪州へ寄贈された日本画巨匠の作品 25 点が、晴れて豪州首都のキャンベラにある「ナショナル・ギャラリー・オブ・オーストラリア」に、メルボルンの「ナショナル・ギャラリー・オブ・ビクトリア」から移管されることとなりました。

寄贈された当時はキャンベラに大きな美術館がなかったため、今まではメルボルンの美術館で保管されておりました。

2016年に当会会長のギッシュ、及び理事の霧生、羽鳥の三名がメルボルンに渡り、現地で関係機関と協議をして、レスリー・キホー女史やポーリン・ガンデル女史等の協力を得て、今回の移管の運びとなりました。

この時の詳細につきましては、2016年7月発行の第59号会報誌で既に報告済みとなっておりますが、まだお読みでない方は、当会のホームページ上のPDFファイルでお読みいただく事ができます。

3月31日 つどいの会 開催のお知らせ

講演タイトル 「豪州アレコレ」

日時： 3月31日(土) 12時45分(開場) 13時(開始)～14時30分(終了)

会場： 銀座教会 地下会議室 住所： 東京都中央区銀座4-2-1 電話： 02-3561-2910

参加費： 無料

講師： 角谷 滋 (すみやしげる) 昭和32年生まれ

オーストラリアは日本にとって、「食料」や「資源」の面等で、とても関係性の深い国です。今回の「つどい」でお話しいただく講師の方は、長年、大手商社で資源関連の仕事に携わっており、イギリスやインドネシア駐在後、オーストラリアのパースやシドニー、ブリスベンに長年駐在し、同商社のオーストラリア現地法人の所長や社長を歴任しておりました。

今回、日本に帰国されたため、講師の方と一緒にお茶を飲みながら、オーストラリアでの長年の生活や仕事を通しての経験や知見等、オーストラリアに関する様々なお話を伺いたいと思います。

【講演内容】

自己紹介 / 豪州おさらい / 日豪関係 / 豪州ビジネスー全体像 / 資源国としての豪州 / Aussie English、アメリカ・イギリス英語との違い / 交友関係 / 豪州での生活・エピソード / その他

会費納入のお願い

年会費納入をお願いいたします。子ども達に、より良い日本を残すための当会の活動内容は現在まで高く評価されて参りました。これも皆さまのご理解があればこそでございます。引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

日本にあるものはオーストラリアには無く、オーストラリアにあるものは日本には無いと言われており、友好を深め、相互協力を推進することが重要な意味を持つ関係にあります。日豪両国の芸術専攻生の教育交流の発展や、オーストラリアやニュージーランドに寄贈した日本画の里帰り展の実現を通して。相互協力関係の深化を図りたいと思っておりますので、是非ご支援ください。

郵便振替 00130-2-366249 一般社団法人 海外と文化を交流する会
銀行振込 三菱東京UFJ銀行 渋谷支店(普) 0026193 海外と文化を交流する会
会費 10,000円(正会員) 5,000円(特別賛助会員) 3,000円(学生会員)

海外と文化を交流する会事務局
〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-27-6 パインビル内
TEL&FAX 03-3370-7654 e-mail: official@kaigai-bunka.org
<http://www.kaigai-bunka.org>